

募金収入・援助金支出報告

期間：2014年4月1日～2015年9月30日



カリタスジャパン 東日本大震災復興支援活動報告

2016年3月

■ 2014年3月31日現在繰越金 (円)

カリタスジャパンに直接送られた募金の繰越金	392,177,471
国際カリタス経由でカリタスジャパンに送られた募金の繰越金	769,939
合 計	392,947,410

■ 募金収入 (円)

	2014年4月～ 2015年3月	2015年4～9月
カリタスジャパンに直接送られた募金	36,435,905	19,783,455
国際カリタス経由でカリタスジャパンに送られた募金	120,846,393	215,420,986
合 計	157,282,298	235,204,441

■ 援助金支出内訳 (円)

	2014年4月～ 2015年3月	2015年4～9月
【プロジェクト直接費】		
ニーズ調査・活動振り返り		1,023,966
ベース活動全般（傾聴・イベントなど）	160,472,513	69,925,778
その他プロジェクト	4,374,756	250,000
プロジェクト直接費の小計	164,847,269	71,199,744
【プロジェクト間接費】		
プロジェクトスタッフ移動費（交通費、ガソリン、レンタカーなど）、事務費（通信費、事務機器、文具など）	10,643,783	5,519,231
SDSC スタッフ人件費、福利厚生費（保険）	23,709,772	9,593,194
広報費（活動報告書など）	1,112,734	0
その他（スタッフ会議費、銀行手数料、会計監査費など）	2,255,417	2,734,837
プロジェクト間接費の小計	37,721,706	17,847,262
合 計	202,568,975	89,047,006

東日本大震災の発生から5年を迎えるにあたって

歴史に残る巨大な地震と津波が、主に東北の地を襲った2011年3月11日から、5年となります。あらためてこの大災害で生命を落とされた方々と、その後の復興の過程で亡くなられた方々の永遠の安息をお祈り申し上げます。

被災地全般における復興の歩みはゆっくりと前進していますが、原子力発電所の事故の影響が残る福島県内では、将来を見通すことが難しい状況も続いています。復興庁の統計によれば、昨年12月末の段階で被災地からの避難生活を送っている方々の総数は、一年前の24万人から減ったとはいえ18万人を数え、未だに多くの方々が普通の生活を取り戻すことが出来ずにいます。

カリタスジャパンは、仙台教区をはじめ全国のカトリック教会が被災地で行う復興支援活動を、国内外から寄せられた募金を基にして、継続して支えています。復興支援の現場からは息の長い支援活動を求める声が多数寄せられており、カリタスジャパンとしても、できる限り長期間の支援継続を見通しております。

かつて「絆」という言葉が何度も聞かれましたが、避難生活を続けられる方々の生命をつなぐ「絆」が、いまこそ必要とされています。そして単なる「活動」ではなく、文字通り「ともに歩む」ことが必要なのではないかと感じております。

カリタスジャパンは地元で根ざして存在するカトリック教会を基盤としております。ですから、カトリック教会のあるところにはどこにでも、カリタスの活動が存在しています。その意味で、被災地におられる皆様の「忘れないで」という声に応えて、いつまでも「ともに歩み」続けるのがカリタスの活動です。

またカリタスは公的機関のように巨大な資金をもっているわけではありませんが、地元で根ざして活動しておりますので、規模は小さくとも心に届く支援を実現できるように、努力を続けて参ります。

これまでのカリタスジャパンの活動への多くの方々のご理解とご協力に感謝申し上げますとともに、これからのご支援をお願いしつつ、大震災5年目の報告とさせていただきます。

カリタスジャパン責任司教 タルチシオ

カリタスジャパン東日本大震災復興支援活動報告 2016年3月

2016年3月11日 発行 ©カトリック中央協議会 2016年
編集 カリタスジャパン 発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411
カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)
E-mail info@caritas.jp URL http://www.caritas.jp/

印刷 双文社印刷



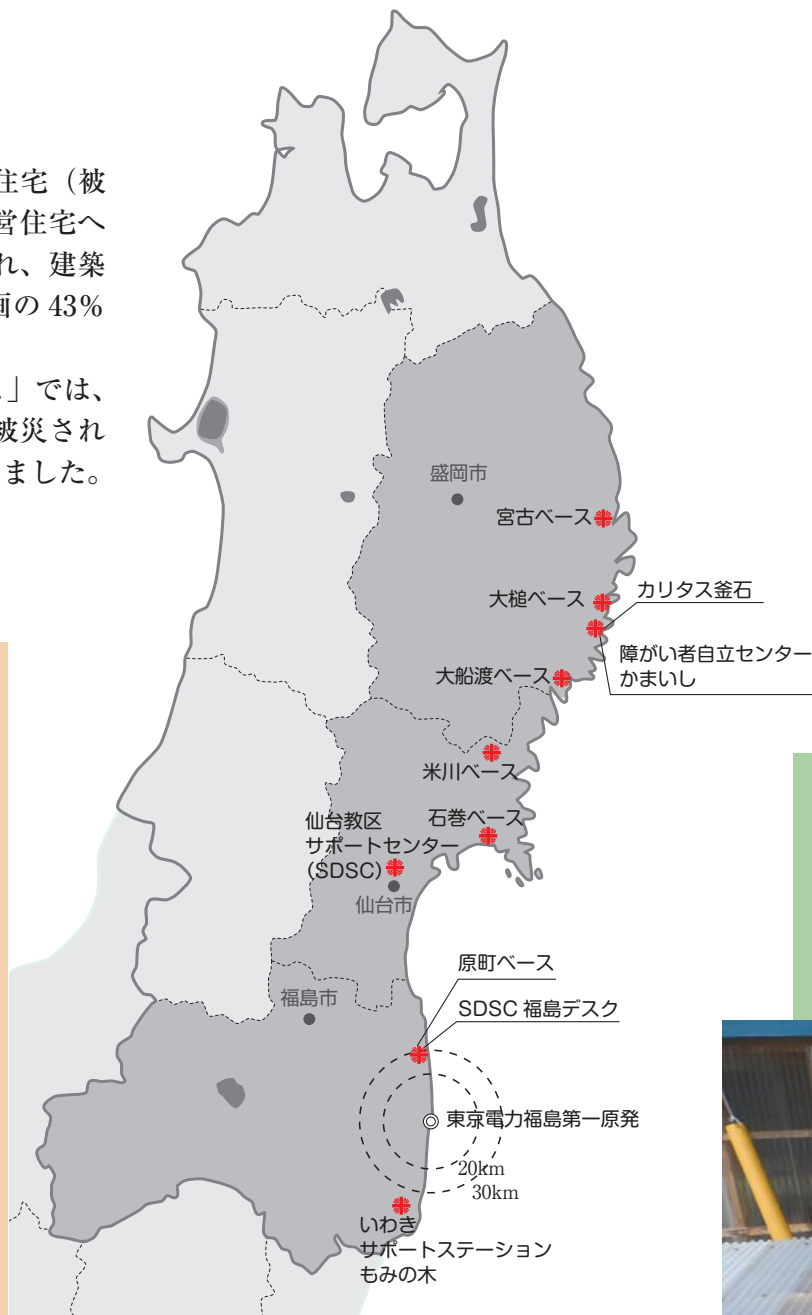
**カリタスジャパンは、カトリック仙台教区が中心となり
日本の全教会が協力して実施する東日本大震災復興支援
活動を支援しています**

この一年は、復興計画に沿って建設が進められた復興公営住宅（被災者向けの公営住宅）が完成を迎え、仮設住宅から復興公営住宅への引越しが本格化した年でした。それでも、土地造成の遅れ、建築資材の高騰や人手不足などの影響で建設は遅れ気味で、計画の43%が完成したに過ぎません（復興庁 2015年9月現在）。

被災地に設置された8カ所の支援活動拠点「カリタスベース」では、これまでの活動を引き継いで、スタッフとボランティアが被災された方々に寄り添い、生活再建のための様々な支援を行ってきました。

すでに4年を越え仮設住宅に住み続けることを余儀なくされている人の中には、いまだに生活再建の目処が立たず、焦りや不安を感じストレスから体調をくずす人、気力を失い部屋にこもりがちになる人、抑うつ症状になる人も見受けられます。一人で孤立してしまわないよう、サロンやイベントなどを通して、いつでも話ができる環境作り、コミュニティ作りに協力しています。

仮設住宅集会所でボランティアが腹話術を披露



ベースで開催する「子どもサロン」のイベントで七夕飾りを作りました

子どもたちの支援も必要です。つらい震災の体験や、不自由な仮設住宅での生活などからくるストレスで、子どもたちは、落ち着きがなくイライラしたり、思わぬ行動に走ったりすることがよくあります。地域の将来を担う子どもたちの成長を願って、各ベースでイベントを企画したり、子どもたちといっしょに遊んだりしています。

全国の避難者18万人の内10万人（県内避難5.9万人、県外避難4.3万人）が福島の避難者です（復興庁 2015年12月現在）。一部の市町村で、原発事故後出されていた避難指示が解除され、帰還が始まっています。帰還は同時に、これまで提供されていた補償の打ち切りを意味します。長い間待ち望んだ帰還

ですが、元の生活を取り戻すには、社会基盤の再建、住宅の修復、生計の確保など、いくつものハードルを越えなければならず、厳しい状況が続いています。

新たに帰還が始まった地域では、震災後4年以上も経ったこれからが復興の始まりで、瓦礫撤去や住宅の片付けなど、ボランティアの手による支援を必要としています。



仮設住宅からの引越しのお手伝い